



AA スクール学長の功罪

AA スクール助手、東ロンドン大学非常勤講師
連 健夫

「次の学長選挙には出馬しない」。1994年春、AA スクール学長のアラン・バルフォアはこう明言した。前任者のアルビン・ボヤスキー死去に伴う91年の学長選挙でナイジェル・コーツなどを破って就任してから、わずか3年のことである。

財政立て直しが最大の功績

バルフォアはAA スクールに何を残したのか。第一の功績が財政再建である。AA スクールは長い間、財政難にあえいでいた。彼にとって、それを建て直すことが急務だった。まず、お金の出入りを透明化し、広告や出版費などの支出の中から、無駄なものを削減した。また、学生数を3年間で12%ほど増やしたためその分の増収があった。その結果、財政上の不安は一応解消された。

教育内容では、一般教科の充実を図るとともに、それまで比較的ルーズだった必修論文やレポートの提出期限を厳しく管理した。これにより「卒業設計審査は通ったが論文は未提出」といった奇妙な卒業生が生じないようにした。

問題残した大学院の新コース

反面、新たな問題呼び込むよう

な政策変更もあった。大学院に新設した1年半のコース、グラデュエートデザインである。指導教授は米国から招いた評論家、ジェフリー・キブニスである。これは、校外に教室を借り、共同で設計を実施するシステムを取っている。教師が各学生を見回り指導するわけである。プログラムの最初の1年間はグループワークに充て、個人ワークは最後の半年間となっている。

問題は、指導教授の関与が最初の1年間に限られ、後半の個人ワークは教師が十分にかかわらないこと、最終審査会までオープンな講習会が一切ないことである。学生にとっては、作品を高めるための客観的批評を得る場がなく一発勝負になるわけで、荒っぽいプログラムと言わざるをえない。これは教師の指導の質を客観的にチェックする機会を持ってないことにもなる。また、ほかのコースはだれもが参加できる講習会を頻繁に実施しており、ほかの教師や学生によって作品の質が評価されるのである。

このほか、学部新たに導入したユニットの質も問題になった。ユニットとは、2、3人の指導者と10～15人の学生が作る一つのチームである。新ユニットの指導者の多くが実務畑出身だったが、彼らは建物のまとま



次期学長選への不出馬を表明したアラン・バルフォア氏

りを重視するあまり、学生の個性や創造性を引き出すことがおろそかになった。そのため、新ユニットの多くが消滅の道を歩むことになった。

バルフォアの政策は、建築の国際化への対応、大学院の充実を図ることを主眼にしたものだ。しかし新政策が学内の一部にあつれきを呼んだのも事実であり、それが次期学長選不出馬の一因になったと想像される。

現在AA スクールでは、次期学長を世界中から探している。前回の候補者を含め、有名建築家や他大学の建築学部長の名も挙がっている。

連(むらじ)健夫氏は、1956年京都府生まれ。79年に多摩美術大学建築科を卒業し、82年に東京都立大学建築学科大学院修士課程を修了。同年から91年までバコーポレーションに勤務。91年にロンドンAA スクールに入学。94年に同大学院を修了して助手を務める。